

私がうちへ入ると間もなく車の音が聞こえました。今のようにゴム輪のない時分でしたから、がらがらいう嫌な響きがかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で止まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかりたった後のことでしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴れ着が脱ぎ捨てられたまま、次の部屋を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちにすまないというので、飯の支度間に合うように、急いで帰ってきたのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私にとつてほとんど無効も同じことでした。私は食卓に座りながら、言葉を惜しがる人のように、そっけない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言でした。たまに親子連れで外出した女二人の気分が、また平生よりはすぐれて晴れやかだったので、われわれの態度はなおのこと目につきます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いをかけました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追及しました。私はそのときふと重たいまぶたを上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し震えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとか思われぬのです。お嬢さんは笑いながらまた何か難しいことを考えているのだろうかと言いました。Kの顔は心持ち薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事のとき気分が悪いと言ったのを気にして、奥さんは十時頃そば湯を持ってきてくれました。しかし私の部屋はもう真つ暗でした。奥さんはおやおやと言って、仕切りのふすまを細目に開けました。ランプの光がKの机から斜めにぼんやりと私の部屋にさし込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に座って、おおかた風邪をひいたのだから身体を暖めるがいいと言って、湯飲みを顔のそばへ突きつけるのです。私はやむをえず、どろどろしたそば湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗い中で考えていました。無論一つ問題をぐるぐる回転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣の部屋で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声をかけました。すると向こうでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかとふすま越しに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて聞きました。今度はKの答えがありません。その代わり五、六分たったと思う頃に、押し入れをがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがてランプをふつと吹き消す音がして、うち中が真つ暗なうちに、しんと静まりました。しかし私の目はその暗い中でいよいよよさえてくるばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声をかけました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いたことについて、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論ふすま越しにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即座に得られることと考えたのです。ところがKはさつきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。